

エリザベス朝の「イングランド秘密情報部の父」サー・フランシス・ウォルシンガム (1530? - 90)

川成, 洋

(出版者 / Publisher)

法政大学小金井論集編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学小金井論集 / 法政大学小金井論集

(巻 / Volume)

4

(開始ページ / Start Page)

173

(終了ページ / End Page)

183

(発行年 / Year)

2007-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004329>

エリザベス朝の「イングランド秘密情報部の父」

サー・フランシス・ウォルシンガム（一五三〇？―一九〇）

川 成 洋

一五五八年一月一七日払暁、イングランド女王のメアリー一世（在位一五五三―一五五八年）が亡くなった。それを待っていたかのごとく、そのわずか六時間後、ホワイトホールに参集した貴族院・庶民院は一団となって正式にメアリーの異母妹の女王即位宣言を発表した。国中がこの若い新女王の即位に沸いた。美しく、聡明で、凛とした姿はまさに王者のごとく堂々とした、二五歳のエリザベス一世の誕生であった。だが、これまでのエリザベスは、運命の悪戯に翻弄されてきたというべきか、私生児、王位継承者、反逆者、途方もなく膨大な財産の相続者、ロンドン塔の囚人とあった波乱万丈野の青春時代を過ごしたのだった。翌年一月一五日に挙行された戴冠式の一週間後の議会に初めて臨席した女王が一日も早く結婚をといて嘆願書に対して、「『この女王はこのような時代を治めたので、未婚の処女として死んだ』と大理石に刻んでもらえれば、私にとって思い残すことはないであろう」と宣言したために、一挙に国民の希望の星となったのだ。

折しも、イングランドは、父親のヘンリー八世が創設したイギリス国教会と旧来のカトリックとの宗教紛争のために分裂し、対外的には海峡の対岸の「イングランド王国の宝石」カレーをフランスにむしり取られ大陸に足場を失い、しかもスペインとフランスのカトリック二大国がイングランドの首根っこを押さえこむ機会を伺っている、まさに厳

しい内憂外患に晒されていたときであった。それにもましてというべきか、彼女には他人の特徴を素早く見抜く慧眼、彼女のためにすすんで献身したいと思わせる女性らしさ、つまり稀有なほど優れた人心掌握術の持ち主であった。

宗教上の理由のために大陸でひっそりと暮らしていたイギリス人の間にはかなり前からエリザベスの即位待望論もあった。彼女の異母義姉のメアリ一世が、神聖ローマ帝国皇帝カール五世（スペイン王カルロス一世、ただしスペインでは、「カルロス五世」と呼ばれている）の長男フェリペと結婚し、カトリック擁護のために国教徒に対して「流血のメアリ」という異名を頂戴するほどの苛酷な弾圧を続けたからだだった。このために命からがら国外に脱出した「メアリ女王時代の亡命者」たちは、エリザベスの登位の知らせを聞いて、フランスやオランダなどの大陸の蟄居先から意気揚々と帰国の途についた。

小柄で、眼の鋭い青年で、どちらかといえば、南欧的な感じのするフランシス・ウォルシンガムもそのひとりだった。だが、彼の大陸での生活は他の亡命者たちと全く異なっていた。ひっそりと目立たぬように暮らしていたのではなく、若者特有の野心と言うべきか、帰国後の自分の目標をびたりと見定め、そのために日夜専念していたのだった。彼は敬虔なというよりは、過激な国教徒であった。

* * * * *

ヘンリー八世の王室法廷弁護士を父に、ノーフォークの熱烈なプロテスタントの旧家に生まれたウォルシンガムは、ケンブリッジ大学キングス・カレッジで法学を専攻し、一五五二年に卒業する。卒業と同時に法曹界の登竜門の一つであるロンドンのグレイズ・イン・ロー・スクールに入学するが、弁護士の夢を捨てて、メアリ女王のカトリック体制に反対するために大陸に渡る。抜群の語学力を生かして、都合六年間、主にイタリアとフランスに逗留する。イタリアでは、スパイ専用の秘密文書の書き方を改良している数人の貴族からの知遇を受け、記号と暗号の解読と実践的研究に没頭する。

フランスに亡命中、イギリス人としては細身であり、皮膚が黒く、彫の深い顔だったために、しかも同胞と余り交わらなかつたので、イタリア人とよく間違われ、逆にこれを最大限に利用したウォルシンガムは、時にはイタリア人のように振る舞い、さまざまな陰謀関係者と接触し、その筋の人脈と技術を身につけた。さらにフランス宮廷で密かに進行しているイエズス会支援の反エリザベス陰謀の動きを逐一本国の首席國務大臣であり、若手高官のナンバーワンである、当時三八歳のバーリー卿ウィリアム・セシルに報告していた。

一五五八年、晴れてイギリスに帰国し、今までの復讐としてカトリック勢力への迫害に積極的に荷担する。これがエリザベスの篤い信頼を獲得することになり、バーリー卿の推輓で六九年に内務省付秘密情報部の責任者に任命される。翌年にフランス国内で暗躍しているイギリス人のスパイを統括し、陰謀活動の全権を掌握するために、フランス大使に抜擢される。ようやく四〇歳に手が届く頃であった。パリに駐在中の七二年八月、プロテスタントの普及を恐れたカトリック側が約五万ものユグノー派新教徒を虐殺した「聖バーソロミュー事件」を実際に見聞して、カトリックに対する不信と憎悪を一層つのらせる。これは、フランス王アンリー二世の後カトリック・ド・メディシスがメアリ一世の伯父ギーズ公と図って起こした大虐殺といわれている。しかもカトリック側には、かつてのメアリ一世の夫であったスペイン国王フェリペ二世、ローマ教皇グレゴリウス一三世がその背後に控え、ユグノー側にはエリザベス一世、ドイツのプロテスタント諸侯の期待がかかっていた。宗教的不寛容の象徴として後世にその名を留める不幸な事件であった。

三年の在勤後の一五七三年に帰国、エリザベス女王の詔勅を受けてロンドンで最初の国家レベルの総合的な情報機関を創設し、その責任者にウォルシンガム自身が就任した。直ちに彼は、フランス、ドイツ、イタリア、オランダ、スペイン、トルコなどに密かに腹心のスパイを送り込み、スパイ・ネットワークを構築する。その数は約七〇人に及んだ。国外にいる自国の外交官全員を、その忠誠心が完全に証明されるまで監視するためだった。このスパイ・ネッ

トワークはほとんど彼の個人的な資金で賄われたのだった。「情報にはいくら金を払っても高すぎることはない」が、彼の持論であった。七五年、國務大臣となり、七七年、ナイト爵に叙爵され、「サー」の称号が許されたのである。さらに大蔵卿、枢密院議員などに推挙され、とんとん拍子に出世していった。

このような国政上の重責に就き、まさに寝食を忘れて仕事に励むが、彼の真骨頂は、なんとも、部下のスパイにいろいろと指令するスパイマスター、また彼自らがその黒幕として行う陰謀や策略といったスパイ活動そのものであったろう。例えば、一五八三年、駐仏大使のサー・エドワード・スタッフォードがスペインからスパイの報酬を受け取っていたという噂を耳にし、ロジャースという信頼できる懐刀をスパイとしてパリに送り込む。彼の情報から判断すると、やはりスタッフォード大使はまぎれもないスパイであることが判明する。だが、ウォルシinghamは駐仏大使をそのまま泳がせておき、本国から虚偽の情報を流しつづける。この情報が駐仏大使を経由してそっくりスペインに渡り、しかも彼からスペインの情報入手する。つまり、スタッフォード大使の方はまったく気づかないが「二重スパイ」にさせられていたのだった。こうして、ウォルシinghamは宿敵スペインの動静を把握できたのである。

ところで、エリザベス女王にも頭痛の種が二つあった。独身の彼女には、ヨーロッパ中からおびただしい数の求婚者が名乗りをあげた。たとえば、メアリの夫だったスペイン王フェリペ二世。彼はイングランドのプロテスタント化を防止するために犠牲的精神で結婚しようとしていたが、エリザベスは実際に会ったことのない男性と結婚するわけにいかないと拒否する。他にはスウェーデン王、神聖ローマ帝国皇帝の次男、フランス王アンリ三世の弟アランソン公などであった。イングランド女王の伴侶としてふさわしいかどうかをチェックするために彼らの生活を厳密に調べ上げたのもウォルシinghamであった。結局、彼の評価はおしなべて「不可」であった。もちろん。カトリック教徒との結婚は論外であった。こうして、エリザベスは「栄光の処女王」として甘んじなくてはならなかった。

もう一つの頭痛のほうが大きかった。元フランス王妃で、スコットランド女王にして、敬虔なカトリック教徒のメ

アリ・スチュアート（一五四二―一八七七年）との確執である。両者はともにヘンリー七世の孫で、イングランドの正当な王位継承者であった。エリザベス女王はローマ教皇ピウス五世によって「偽りのイングランドの女王」と断罪され、その挙句に破門されたため、次の教皇で新教徒の弾圧で有名なグレゴリウス十三世はメアリのイングランド王位継承権の要求を断固として支持していた。つまり、両者の間の新・旧キリスト教の激烈な対立をめぐっては、ローマ教皇も絡んでいたのである。ここまでくると、この二人はイングランドの王座を争う単なるライバルではなく、すでに不倶戴天の敵同士になっていたのだった。

一五八二年、イングランド駐在スペイン大使ドン・ナルディノ・メンドサがスコットランドのメアリ女王に密者フランシス・スロックモートンを派遣したが、スコットランド国境で捕らえられた。ウォルシンガムはその密書を読んだ後にこれを元通りに封印して彼を釈放した。もちろん、彼に尾行をつけ、まんまとメアリからの返書も入手した。これで、メアリの手練手管を把握でき、スロックモートンだけをロンドン塔の地下牢で密かに処刑してしまった。その後、スロットモートンの自宅を搜索すると、スコットランド女王がイングランド王位を継ぐ権利を擁護する多数の論文、海外で印刷されたエリザベスを誹謗するパンフレット数冊、外国の軍隊の上陸可能なイングランド港湾の平面図などが発見された。

一五八四年に議会で成立した「女王の身边の安全保障に関する法」で、イングランドの女王に対する陰謀を働いた不届き者は、王家が任命する二四人の陪審員からなる法廷で裁判に付されることになった。この法案の真の狙いはメアリ・スチュアートであった。翌八五年のクリスマス直前に、さしたる理由がないにもかかわらず、メアリはダビシャーのチャートリ城に幽閉される。

メアリの救出とエリザベスの暗殺、さらにスペイン軍のイングランド襲撃を筋書きとする陰謀に二五歳の青年貴族アンソニー・バビントン（一五六一―一八六年）が関与していた。彼の家系は、代々続くカトリックの地主階級で、バ

ピントン自身もメアリ女王の小姓を勤め、やがてロンドンで同志と語らってイエズス会士を援助し、さらにフランスに赴き「打倒エリザベス」を標榜する陰謀家たちと接触していた。この計画の黒幕は、ジョン・バラードというカトリック神父だった。バピントンは単なるメッセンジャーに過ぎなかった。ちょうど、チャートリ城の近くにビール工場があつて、そこから城へ毎週ビールが一樽搬入されていた。メアリとバピントンとの暗号伝言（後に「ロイヤル・サイファー」と呼ばれた）は、防水性の袋（おそらく動物の膀胱だろう）で保護され、ビール樽に入れられて定期的に運ばれた。当然、メアリの支持者になりすました二重スパイ、ジフォードを城の中へ遣わしたウォルシンガムは、彼が密かにビール樽からぬき取った伝言と樽に入れる前の彼女の手紙も解読したが、メアリの伝言には自分の救助のためにスペイン軍のイングランド侵攻を要請しているだけで、エリザベスの暗殺計画など一切触れられていない。

そこでウォルシンガムは、ジフォードを使ってバピントんにエリザベス暗殺計画をメアリに知らせて了解を取ったかどうかとそそのかささせた。これが重大な罠だとは露知らずに好機到来と見たバピントンは嬉々として、用意周到な暗殺計画の全貌をメアリに伝える。というか、この重大な陰謀の中で自分がどのような役割を果すことになるか、女王に知ってもらいたかったのだ。さらにこの計画が成功すると確信していたのだろうか、無邪気にも、彼は五人の間と一緒に並んだ肖像画——「それぞれの任務を負った教皇の白い息子たち」——を描かせた。

バピントンのメアリに伝えた内容は、スペイン軍を主力とするカトリック軍のイングランド侵攻、国内各地でのカトリック勢力の一斉武装蜂起、「六人の気高い紳士」によるメアリの救出、篡奪者エリザベスの追放など、実に荒唐無稽なものであった。メアリからの返事が例の樽の中に入れられて届けられた。「六人の気高い青年貴族がこの計画を遂行したら、私を直ちにここから救出してください。・・・」とあった。ウォルシンガムはついにエリザベスの暗殺計画に同意したメアリの伝言を握ったのだ。彼が雇ったロバート・ポウリーは、以前からメアリ女王救出に腐心しているカトリック陰謀団に加わり、彼らの動静を探りながら、バピントんに接近し、ついに一五八六年八月、彼

を自宅の食事に招待するほどの間柄になった。当然、事前の打ち合わせ通り当局の追っ手が急襲するが、その家はおもぬけの殻になっていた。だが、追っ手は追跡を緩めなかった。二日後、ジョン・バラード神父が逮捕され、髪を切り落とし胡桃の樹液を肌に塗って変装したバビントンもその一〇日後、空腹のため友人宅に立ち寄った時に逮捕された。このようにバビントンを首謀者とする陰謀グループは一網打尽に捕らえられ、おそろしい拷問台が待ちうけているロンドン塔に投げ込まれたのだった。バビントンは穏やかな顔つきで、陰謀の中の自分の役割をすらすらと自供し、陰謀全体をバラード神父になすり付けたのだった。九月二〇日、神父を加えた七人の陰謀者がロンドン塔から市民の罵倒を浴びながらセント・ジャイルズ広場へ引つ立てられた。最初の処刑はバラード神父であった。彼は苛酷な拷問のために今や身体が不自由になっていた。そしてひとりずつ首にロープがかけられた。最後のバビントンは「主なるイエス・キリストよ、我らをお許し給え」とラテン語で叫んで絶命した。全員の首に掛けられたロープが切り落とされ、彼らの性器が抉り取られ、群集の前に高々と掲げられたのだった。そしてついにエリザベスの暗殺計画に同意したメアリも縲縛の身となる。メアリの裁判は、一〇月一五日、ノーサンプシャーのフォザリングエイ城内の、総勢二三〇人を越える枢密院議員、爵位貴族、判事らからなる特設法廷で開始された。果たせるな、フランス、スペインといったカトリック列強から直ちに中止せよといった圧力がかけられたが、それが仇となってか、死刑が宣告された。その二ユースは直ちにロンドン市内に広まり、街路にはかがり火が炊かれ、尖塔から尖塔へと鐘が鳴り響いた。

さすがエリザベス女王も、メアリ・スチュアートの死刑執行の公文書に署名するのをためらったが、一五八七年二月一日、急遽一〇人の国家諮問会議が招集され、この会議が責任を負うことになって、女王が署名することになった。署名された公文書はエリザベス女王によって無造作にも床に投げ捨てられたという。その一週間後の二月八日、メアリは「私が立派なカトリック教徒として帰天したと、友人たちに伝えてください」と、側近のメルヴィルに命じ、同じフォザリングエイ城の大広間に即席に作られた断頭台で、居並ぶ貴族たちの目の前で処刑されたのである。これが、

イギリスの陰謀史に残る悪名高い「バビントン・プロット」の顛末である。

これの唯一の立役者であるウォルシンガムは、良心の呵責のためか、それとも肝が座っていないのか、メアリの処刑に立ち会わなかったといわれている。しかし、メアリの死体から衣服を脱がせて、それをずたずたに切り裂き、さらにカトリック信者を示す一切合財を残してはならない、外科医に遺体の防腐保存処置を施し、墓泥棒から守るために鉛の裏打ちをした棺の中に遺体をおさめるよう厳命したのは、ウォルシンガムであった。

このメアリの処刑がカトリック諸国の憤懣を引き起こし、翌年の一五八八年、ハプスブルク帝国体制の筆頭国であり、キリスト教世界をカトリック信仰で統一する「カトリックの擁護者」を任ずるスペイン国王フェリペ二世は、「神にも人にも憎まれた女」エリザベスを断罪し、イングランドを制圧のために「無敵艦隊」（ちなみに、この名称はイギリス側が付けたのであって、当のスペインでは単に「大艦隊」と呼ばれていた）の遠征に踏み切った。確かにスペインとイングランドとの関係は、スペインの統一を果たしたイサベル一世とフェルナンド二世の「カトリック両王」の三女、カタリーナ・デ・アラゴン（英語名、キャサリン・オブ・アラゴン）がヘンリー八世の妃となるといった友好的な関係だったが、エリザベス女王の即位以降、しだいにカブリ海でのイングランドの海賊船がスペインの独占的な植民地体制を脅かすようになり、またフランドルの反スペイン闘争を積極的に支援するなど、悪化の一途を辿っていた。その挙句に、スコットランドにおけるカトリック再興の切り札であったメアリ・スチュアートの理不尽な処刑。フェリペ二世のイングランド征伐の決断は当然の成り行きであろう。

スペインのこの動きを事前に察知したウォルシンガムは、亡命中に培った自らの個人的なスパイ・ネットワークを活用して、ヨーロッパの列強、さらにローマ教皇庁、あろうことかスペインの宮廷から情報を収集し、またフェリペ二世の財政面での援助を断念するようジェノバの金融業者たちをそのかした。そのうえ高額でフラマン人（現在でも氏名は不詳だ）を雇い入れ、無敵艦隊司令官、サンタ・クルス侯爵が国王に手わたした全陣容の写しを入手させた。

当時のスペイン王室の歳入全額を投じてリスボン港で編成された戦艦六八隻を含む、約一三〇隻の「無敵艦隊」には、陸海軍あわせて約三万もの将兵、それにイングランドをローマ教皇の下に取り戻すために、一八〇人の神父や修道士などの聖職者が乗り込んだ。停泊地のラ・コルーニャに集結しつつあるスペイン艦隊を先制攻撃するために、エリザベスが「私の海賊」と命名したサー・フランシス・ドレイクの「私拿捕船団」を急遽派遣した。海戦の場合、スペイン側の戦術は幅の広い半月方陣を作った大型ガレオン船による伝統的な体当たり方式であり、一方、イングランド側は、射程の長い軽砲を装備した機動性のある小型船戦術であった。このため、七月末の緒戦段階からスペイン軍に不利となっていたが、さらに予期せぬ悪天候が重なり、ドーバー海峡を北へと進みスコットランド沖で嵐に翻弄され、そしてカレー港で、まさに「スペイン王の髭を焦がしてやる」とドレイクが大言したように、火船の攻撃を受けたために、統率と士気を失いほうほうの態でスペインの方へ進路を取ったのだった。スペイン艦隊を追尾するイングランド海軍の水兵は、「スペインの羽毛を一本一本むしり取っていった」と揶揄したほどであった。約一三〇隻のうち、スペインに帰港できたのはほぼ三の二に過ぎなかった。「余は、敵と戦うために大艦隊を派遣したのであって、神のしろしめす風や波と戦うためではない」とフェリペ二世は悔しがったという。これで、スペインの海上権は大打撃を受け、その覇権が大きく揺らいだのだった。宿敵エリザベスを「あのあばずれ女」と罵ったところで、今や遅しであった。他方、この戦争前にドレイクの「私拿捕船団」に大金を投資して、事前の協約通りに利益の分け前をたっぷり獲得したエリザベスは笑いがとまらなかつたであろう。

こうしてエリザベス女王の二度の危機を見事に勝利に変えたウォルシンガムは、すでに述べたように、その秘密情報機関を私費で賄っていた。彼は自分が創設した情報部を何とか維持していたために破産してしまつたが、エリザベス女王は肌の黒い彼を「私のモーロ人」と親愛の情を込めて呼んでいたものの、財政的な援助は一切しなかつた。すでに高官たちは賄賂や脱税などで私腹を増やしていた。彼はこうしたことに一切手を染めず、ただ女王からの下賜

を待っているだけだった。こうした状況を不憫に思ったのか、彼の政界の後見人であるバーリー卿の女王へのたつての進言ですら完全に無視されたのだった。さすが絶対王政のもとで君臨する国王、というべきか。一五九〇年四月、極貧の真只中で死んだウォルシンガムに残されたものは、膨大な負債であった。死因は率丸腫瘍だったといわれている。彼の葬儀は、債権者たちには知られないようにひっそりと執り行われた。娘のレディ・シドニーも、血は争えないのだろうか、夫のサー・フィリップ・シドニーとともに父の遺志を継いで、スパイ活動に参与することになる。実は、彼の娘婿の途方もない借金の肩代わりをしたために、破産したともいわれている。

ウォルシンガムの死去は、直ちにスペインに伝えられたが、フェリペ二世の後を継いだ長男のフェリペ三世は、「これは、いい知らせである。本当に喜ばしい！」と叫んだという。

エリザベスに「女王は余りにも運命を当てになされる。もっと全能なる神を頼られるとよい」と進言しつつ、冷静沈着にエリザベスの政敵をつぎつぎと倒し、常に聖職者のように黒衣をまとい、時に得意の二枚舌や恫喝的な言辞を操っていたウォルシンガムは暗い謎に満ち、危険と策略に長けた闇の人間、と同時代の人になみなされてきたようだ。まさに情報機関のために生まれてきたうつつけの人間だった。

参考文献

- Hurstfield, Joel. *Elizabeth I and the Unity of England*, Pelican Books, 1971.
Neale, J. E. *Elizabeth I and Her Parliaments 1559-1581*, Jonathan Cape, 1958.
Neale, J. E. *Elizabeth I and Her Parliaments 1584-1601*, Jonathan Cape, 1957.
Smith, Lacey Baldwin. *Elizabeth Tudor: Portrait of A Queen*, Jonathan Cape, 1975.

- MacNalty, Arthur Salusbury. *Elizabeth Tudor: The Lonely Queen*, Christopher Johnson, 1954.
- Levin, Carole, ed. *Elizabeth I: Always Her Own Free Woman*, Ashgate, 2003.
- Johnson, Paul. *Elizabeth I: a study in power and intellect*, Futura Publications, Omega Books, 1976.
- Haight, Christopher. *Elizabeth I*, Pearson Education, 2001.
- Strong, Roy. *The Cult of Elizabeth: Elizabethan Portraiture and Pageantry*, Pimico, 1999.
- Kinney, Arthur F. *Elizabethan Backgrounds: Historical Documents of the Age of Elizabeth I*, Archon Books, 1975.
- クリストファー・ヒパート『女王エリザベス——波乱の青春』山本史郎訳、原書房、一九九八年。
- トム・マグレガー『エリザベス』野口百合子訳、新潮社、一九八六年。
- D・スターキー『エリザベス——女王への道』香西史子訳、原書房、二〇〇六年。
- 才野重雄『断頭台の女王——メアリー・ステュアート、悲劇の生涯』NCI、一九八六年。
- 石井美樹子『薔薇の冠——イギリス王妃キャサリンの生涯』朝日新聞社、一九九三年。
- 石井美樹子『挑まれる王冠——イギリス王室と女性君主』御茶ノ水書房、一九九九年。
- 江村洋『カール五世——中世ヨーロッパ最後の栄光』東京書籍、一九九五年。
- 克蘭ク・レンウィック『とびきり哀しいスコットランド史』小林章夫訳、筑摩書房、一九九四年。
- J・R・グリーン『イギリス国民の歴史——新王制からエリザベスの時代まで』和田勇一訳、篠崎書林、一九八六年。
- 伊東章『南の悪魔フェリッペ二世』鳥影社、二〇〇六年。
- 高橋祐史『イエズス会の世界戦略』講談社選書メチエ、二〇〇六年。
- 今井宏編『イギリス史 二 近世』山川出版社、一九九四年。
- 森護『スコットランド王国史話』大修館書店、一九八八年。

東浦義雄『スコットランドXIの謎』大修館書店、一九八八年。

茨木晃『スペイン史概説』アポロン社、一九七八年。

立石博高編『スペイン・ポルトガル史』山川出版社、二〇〇〇年。

川成洋『スペインの歴史』河出書房新社、二〇〇五年。